古い村

若山牧水

青空文庫

自分の故郷は日向國の山奥である。恐しく山岳の重疊した峽間に、紐のやうな細い溪が深く流れて、溪に沿うてほんの僅かばかりの平地がある。その平地の其處此處に二軒三軒とあはれな人家が散在して、木がくれにかすかな煙をあげて居る。自分の生れた家もその中に混つて居るので、白髪ばかりのわが老父母はいまだに健在である。

斯く山深く人煙また極めて疎なるに係らず、わが生れた村の歴史は可なりに古いらしい。矢の根石や曲玉管玉等を採集に來る地方の學者——中學の教師などが旅籠屋の無いまゝによく自分の家に泊つては、そんな話をして聞かせた。平家の殘黨のかくれ棲んだといふ説も或は眞に近い、よく檢べたら必ずその子孫が存在して居るに相違ないとも言つた。斯かる話は斯かる峽間の山村に生れたわが少年の水々しい心を、いやに深く刺戟したものであつた。自分の家は村内一二の舊家を以て自任し、太刀もあり槍もあり、櫃の中には縅の腐れた鎧もある。

自分の八歳九歳のころ、村に一軒の小學校があつた。とある小山の麓に僅かに倒れ殘つた荒屋が即ちそれで、茅葺の屋根は剥がれ、壁は壞れて、普通の住宅であつたのを無理に教場らしく間に合せたため、室内には不細工千萬に古柱が幾本も突立つてゐた。先生はこの近くの或る藩士の零落した老人で、自分の父が呼寄せて、郡長の前などをも具合よく繕つて永くその村に勤めさせてゐたものであつた。恐しい酒呑みで頑固屋で、癇癪持ちで、そして極めての好人物であつた。自分は奇妙にこの老人から可愛がられ、清書がよく出來た本がよく讀めたと云つて

は、ありもせぬ小道具の中などから子供の好きさうなものを選り出して惜しげもなく自分に呉れてゐた。飲仲間の父に對つてはいつも自分のことを賞めそやして、貴君は少し何だが、御子息はどうして中々のものだ、末恐しい俊童だ、精一杯念入にお育てなさるがいゝ、などと口を極めて煽てるので、人の好い父は全くその氣になつてしまひ、いよいよ甘く自分を育てた。

學校に於ける大立者は常に自分であつた。自身の級の首席なるは勿論のこと、郡長郡視學の來た時などの送迎や挨拶、祝日の祝詞讀みなども上級の者をさしおいて、幼少の矮小の自分が獨りで勤めてゐた。で、自づと其處等に嫉妬猜疑の徒が集り生ぜざるを得ない。そしてその組の長者と推薦せられたのは、矢野初太郎といふ一少年であつた。

初太郎は自分に二歳の年長、級も二級うへであつた。その父は博勞で、博徒で、そして近郷の顔役みたやうなことをも爲てゐた。初太郎はその父とは打つて變つた靜かな順良な少年で、學問も誠によく出來た。田舍者に似合はぬ色の白い、一寸見には女の子のやうで身體もあまり強くなかつた。以前は自分もよく彼に馴染んで、無二の親友であつたのだが今云ふ如く自分の反對黨のために推されて、その旗頭の地位に立つに及び小膽者の自分は飜然として彼を忌み憎み、ひそかに罵詈中傷の言辭を送るに忙しかつた。

それやこれやで、初太郎の自分に對する感情も以前の通りであることは出來難くなり、自然自分を白眼視するに至つた。なほそれで止らず、この感情はわが一家と彼の一家との間に關係するに至つた。その頃、博奕で儲けあげて村内屈指の分限であつた初太郎の父は兼ねて自分の

父などが、常々「舊家」といふを持出して「なんの博勞風情が！」といふを振すの癪に障つて耐らなかつた所であつたので、この一件が持上るに及び、忽ち本氣になつて力み出した。そして萬事につけ敵愾心を挿むに至つた。小さな村のことではあり、このことは延いて一村内の平和にも關係を及ぼさうかといふ勢になつた。で、當の兩個は全く夢中になつて啀み合はざるを得ない。自分の如きは晝夜戰爭にでも出てゐる氣持で勉強した。殆んどもう何年級などといふことには頓着無く、教科書ばかりでは飽足らず、「少國民」「幼年雜誌」などといふ雜誌をも取寄せて耽讀し、つゆほどの知識をも見逃すまじと備へた。

所が初太郎は突如として、その村の小學校を去つて（彼はその頃、尋常科の補習部にゐた）縣廳所在地の宮崎町の高等小學に轉じた。自分との啀み合ひが無かつたのならば當然彼は土地の尋常科補習部を卒業したままで、靜かにその山村生活に入るべきであつたのである。

取殘された自分は、さらばといふので舊藩主の城下たる延岡町の高等小學に進んだ。兩個の少年は遠く三十里の平原を距てゝ尚ほ且つ力み合つてゐたのである。高等小學二年を修業して自分が其土地の中學校へ入つたころは、初太郎は既に中學の二年級であつた。彼の勉強はその地方の評判に上る位ゐになり、勉強狂人と人は評し合つてゐたといふ。勿論自分も勉強した。一時は級の首席をも占領し、可なりに勉強家といふ評判をも取つてゐた。けれどもさういふ時期は極めて短かかつた。中學の二年級の終りの頃からででもあつたらう、嚴格を極めてゐた寄宿舍内の自分の机の抽斗の奥には、歌集「みだれ髪」がかいひそみ、縁の下の乾いた土の中に

は他人の知らぬ「一葉全集」が埋められてあるやうになつたのは。机に對ふことも極めて少なくなり、多くの時間は學校の裏山の木の蔭や、程ちかい海のほとりの砂原で費されるやうになつて了つた。擊劍や野球の稽古に常に小鳥の如く輝いてゐた自分の瞳には日に増し故の無い一種の沈悒を湛へて來た。珍しく机に對つても茫然と考へ込むことが多かつた。

いつの年であつたか、自分は久しく忘れてゐた初太郎の名を新聞で見た。彼が初めから終りまで首席で通して目出たく今回卒業したことを賞讃した報道で、次いで今後直ちに彼は高等學校の醫學部に進むべしと書き添へてあつた。丁度その年のこと、夏になつて自分は休暇で村に歸省した。父母はこの一二年前よりの自分の成績の惡くなつたことを口を極めて叱責し、聲をひそめて、初太郎を見ろと言つた。それでもすぐまた續けて、父は微かな冷笑を眼に浮べて、然し、幾ら勉強が出來たところで、あの身體ぢや既う駄目だ、と言ひ足した。母も續いて、それにあゝ　りがわるくては傳造も息子をば如何することも出來ないだらう、とこれも口邊で聲を出さずに笑つた。自分は心の中で、初太郎が熊本で高等學校の入學試驗を受けに行つてゐて勉強過度の結果急に血を咯いて、其父の傳造が迎ひに行つてからもう一ヶ月半にもなるといふ話を思ひ起してゐた。なほ聞けば、この一年程以前からあの傳造の賽の目の出が急にわるくなつて、瞬く間に財産の大半をば減つてしまつたとかいふことで、どうせ泡のやうに出來たものだから泡のやうに無くなつて行くのも無理は無からうと、母は父を見遣つて微笑した。その横顏を見てゐて自分は少なからず淺間しく且つ面憎く思はざるを得なかつた。我等自身の家で

もその年は血の出るやうな三度目の山賣りを斷行して、辛くも焦眉の急の借財を返した當座では無かつたか。先祖代々が命より大事にして固守し來つた山林田畑を自分等の代になつて賣拂つて、そして「舊家」を誇るといふは少々面の皮が厚過ぎはしないだらうか。斯く思ふと自分はその座の酒さへ耐へがたく不味かつた。

その夏は暮れ、翌年の夏、自分はまた歸村した。初太郎の肺病はやゝ輕くなつてゐて、その頃は折々溪河へ魚釣などにも出て來ることがあつた。或日のこと、自分は我家のすぐ下の瀧のやうになつて居る長い瀬のほとりの榎の蔭で何か讀書してゐた。日は眞晝、眼前の瀬は日光を受けて銀色に光り、峽間の風は極めて清々しく吹き渡り、細かな榎の枝葉は斷えず青やかな響を立てゝそよめいてゐた。雲も無い空は峯から峯の輪郭を極めて明瞭に印して、誠に強烈な「夏の靜けさ」に滿ちた日であつた。何を讀んでゐたのであらう、定かには覺えて居らぬ。とにかくしんみりと身も心をも打ち込んで、靜かな感興を放肆にしてゐたに相違ない。所が不圖何ごころなく眼を書物から外すと、すぐ自分の居る對岸に一個の男が佇んで釣竿を動かして居る。注意するまでもなく自分は直ちに彼の初太郎であることを知つた。

なるほど痩せた。特に濡れた白襦袢一枚のぴつたりと身に密着いて、殆んど骨ばかりの人間が岩上に佇んで居るとしか見えない。多く室内にゐて珍しく出かけて來たのであらう、日に炒りつけられた麥藁帽子の蔭の彼の顏は痛々しく蒼白く、微かに紅みが潮してゐるのがなか〳〵に哀れである。彼の特色の大きい黒い瞳ばかりはさして昔に變らず、すが〳〵しく釣竿の一端

に注がれてある。重さうに彼は時々両手でその竿を動かす。竿が動き、糸が動き、糸のさきにつながれて居る囮の鮎まで銀色の水の中から影を表すことがある。いま彼のあはれな全生命は懸ってその竿の一端にあるのだ。暫く見つめて居るうち、一尾の魚が彼の鉤にかゝったらしい。彼は忽ち姿勢を頽して、腰から小さな手網を抜きとり、竿を撓ませて身近く魚を引寄せ、終に首尾よく網の中に収めて了つた。そして彼はそれを静かに窺き込んで居る。噫、その無心の顔、自分は自分の瞼の急に重くなるを感じた。

一尾を釣り得て彼は少なからず安堵したらしく、竿をば石の間に突き立てゝおいて、岩の上に蹲踞んだ。両手で※を支へて茫然と光る瀬の水を凝視して居る。自分との間は十間と距つてゐない。けれども榎の根もとの岩蔭の自分は彼の眼には入り難い。餘程起き出でて彼を呼ばうかとも思つたが、彼の姿を見てゐては何とも言へぬ一種の壓迫を感じて急かに聲をも出しがたい。自分は終に黙つてゐた。やがて彼はまた立ち上つた。少し所を變へて再び竿を動かしてゐる所へ、その背後の方からまた一人竿を持つて人が來た。傳造である。彼等父子は顔を見合つて莞爾した。そして無言のまゝ竿を並べて瀬に對つた。自分は久しいこと巖蔭の冷たいところへ寢てゐなくてはならなかつた。

その翌年の夏、自分がまた村に歸つた時には初太郎は死んでゐた。或日わざ〳〵前年彼を見た榎の蔭に行つてみた。同じく晴れた日で、風は冴え瀬は光つてゐたけれども、既にその時は如何に力めても、其處の岩上に佇みし彼、曾て自分同様に此所等に生息してゐた彼、及び現に

空冥界を異にしてゐる彼を切實に思ひ浮べることは出來なかつた。彼は死んだ、彼は死んだと徒らに思つたのみで。

不幸は靜かな湖面に石を投げたやうなものであらう、一點から起つて次第に四邊に同じ波紋を擴げて行く。初太郎の死後幾日ならずして彼の父は博奕のことから仲間を傷けて、牢屋に送られたのみならずその入獄の際には彼は烈しい眼病をわづらつてゐたとのことである。これらの話を話す時は、流石にわが母も笑はなかつた。自分の家でも父の手を出してゐた二三の鑛山事業がいよいよ失敗と定まつたので、また近々に大決斷で殘部の山や畑を賣拂はねばならぬことになつてゐたのである。萬事につけ父も母ももう人の惡口を言ふたり笑つたりしてゐる餘裕などはかりそめにも失くなつてゐたのだ。自然無言勝ちになつた父母の顏には汚い白髮が、けば〳〵しく眼に立つて來た。

その翌春、自分は中學を卒業すると同時にひそかに鄕國を逃げ出して東京へ出て、或る私立學校の文學科に入つて了つた。卒業前、父はわざ〳〵村から自分を中學の寄宿舍まで訪ねて來て、いつもに似ず悄然と、何卒この場合精神を堅固にして迷はぬやうに心がけて呉れと寧ろ哀訴するやうに自分に注意した。迷はぬやうにとは、父はかねて自分を直實な醫者にするつもりであり、自分は文學をやると言ひ張つて、久しく言ひ合つてゐたのであつたが、終に自分は内心策をかまへて、表面だけ父の意に從ふやうに曾つて誓つたことがあつたので、何卒その誓ひを完うして呉れといふのである。けれども自分は終にこの老いたる父に反いた。四月六日の夜、

細島港を出帆する汽船某丸の甲板に佇んで、離れゆく日向の土地を眺めやつた時、自分は欄を掴んで、父の顔を思ひやつた。

三年目に自分は重い病氣にかゝり父母から招かれて國へ歸つた。二階のお寺のやうな廣い冷たい座敷に寢て居ると、溪を越して小高く圓い丘に眞青に麻の茂つて居るのが見える。其丘は二三年前まで松や檜の鬱蒼と茂つてゐた所である。その森は父より三代目以前の人とかゞ植ゑ始めたものだと傳へられてゐた。森をめぐつて深い溪がある。丁度我家から見れば淵は青く瀬は白く、ずうつと森を取巻いてゐるやうに見えて、その邊一帶が大きな自然のまゝの庭園ともなつて居るし、朝夕斯う見馴れては他の處と違つてどうしても手離しがたい、こればかりはどうとかして賣らずに置きませうと家中皆が話し合つて居たその森もとうとう斯んな青い畑になつて了つた。よく見れば麻畑の隅の方に粟らしいものが作つてある。もうよく實つてゐると見えて、うす黄に色づいたその畑中に男が一人女が二人、眞晝の日光を浴びてせつせとそれを刈つて居る。唄もうたはず、鎌のみが時々ぴか〳〵と光る。

或日のこと、母が幼い子供を抱いて笑ひながら二階に上つて來た。不思議に思つて見て居ると、母は自分の枕もとに坐つて、その子を自分の方に押し向けて、なほ笑つて居る。田舍者の産んだらしくもない可愛らしい男の子だ。

『何處の子です?』

と訊くと、

『それ、あの初さんのだよ。』

といふ。自分は驚いた。いつの間に初太郎は斯んなのを産へておいたのであらう。聞けば彼の病氣の烈しかつた時一生懸命になつて彼を看護した彼の家の下女が是を産んだのだ相だ。彼女は初めはどうしても誰の子であると言はなかつたさうだが、幾月も經つてからとうとう打明けて了つたといふ。何故かくしておいたかと訊いたら、肺病人の子と知れたらとても眞人間扱ひはせられないだらうと思つたからだと答へるので、それなら何故ずつと隱し通さなかつたと重ねて訊くと、日が經つに從つて段々死んだ人に似て來るからだと言つた相だ。初太郎は自身の子を見ずに死に、勿論子は永久にその父を知らない。自分は急に逢ひたくなつて用事に來て居るといふその子の母を見に下に降りて行つた。色こそ可なりに白けれ、頰骨の太い眉の太い鼻の小さな唇の厚い、夥しく醜い女である。けれども心はいかにも好いらしく、一寸見たゞけでも自分もこの女を可愛く思つた。今は半分盲目のその子の祖父に仕へて羨しいほど仲睦じく暮して居るといふ。自分はその子を抱いてみた。割合ませた口を利く。なるほど見れば見るほど氣味のわるいまで亡き友に酷似して居る。自分の心の奥にはあり〳〵と故人の寂しい面影が映つてゐた。

自分の病氣は二ヶ月あまりで辛くも快くなつた。それを待つて暇を告げて自分は鄕里を去つた。いよ〳〵明日出立するといふ前の晩、兩人の親と一人の子とは、臺所に近い小座敷で向き合つて他人入らずの酒を酌んだ。そのころ、山の深い所だけにこゝらの天地には既う秋が立つ

てゐた。言葉數も少なく、杯も一向に逸まぬ。座の一方の洋燈には冷やかに風が搖いで居る。此ごろでは少し飮めばすぐに醉ふやうになつてゐる父が、その夜は更に醉はない。

『お前、一體そのお前の學校を卒業すると何になれるのだとか云つたな？』

暫く何か考へてゐて彼は斯う問ひかけた。

『左樣ですね、まア新聞記者とか中學校の教師とかでせう。』

『すると何かい、月給でいふとどの位ゐ貰へるのかい？』

自分は窮した。まさかD氏が何新聞で二十二圓、S氏が何中學で二十五圓貰つて居ると、自分の先輩の先例を引くわけにも行かなかつた。自分の默つて居るのをじろ〳〵と見てゐて、

『せめて五十圓も取れるのかい？』

『え、まア確かにとは言へませんがね……それに何です、私はそんな者にならうとは思つてゐませんのですから……』

『そんな者つて……では一體何になるのや？』

『文學……純文學を目下研究してゐますので……』

とは言ひかけたが、是にも窮つた。如何してもこの髮の白い人に向つて、私は詩人になるのです、小說家になるのです、とは言ひ得なかつた。

母も常に不安の眼をおど〳〵させて自分等の話を聽いてゐたが、自分がいよ〳〵答へに困つて來るのを見ると、

『とにかく何かになつて呉れるのだらうね、お前のことだからまさかのこともあるまいと思つて、まア安心はして待つてゐるよ。家もお前、毎年々々斯んな風になつてゆくのでね、阿父さんも急に老けたし、今まで通りの働きも無くなつたしね、まアほんとにお前、夜も晝も心配の絶えたといふことは無いんだから、たゞもうお前一人が頼みでね……』

母の愚痴は長かつた。常には大の愚痴嫌ひの父もその夜はたゞ母の言ふがまゝに任せた。その間自分はつとめて他のことを心に思ひ浮べてゐたが、それでもいつしかいかにも胸が遣瀬なくなつて、つめたい涙は自然に頬を傳つて來る。膝を兩手で抱いて、身を反して開け放した窓さきの樹木に日光の流れてゐるのを拭ひもせぬ眼で見つめて居ると、母もいつしか語を止めてゐた。

自分の村を出はづれたところに、大きな河が流れて居る。其處を渡舟で渡ると、道はやゝ長いこと上り坂になつて居る。その坂の中ほどで自分は久しぶりに傳造に出會つた。黒い眼鏡をかけて、酷くやつれてゐたけれど、自分にはすぐ解つた。一も二もなく自分は歩み寄つて言葉をかけた。彼はもう誰だか少しも覺えが無い。見えない眼を切りに働かせて見定めようとする。

『僕ですよ、私ですよ、田口の藤太ですよ。』

と押しかけて言ふと、初めて合點が行つたらしく、

『ほう左様ですけねえ。』

自分が改めて初太郎のくやみを述べると、それには殆んど返事もせず、何處へおいでなさる

と訊く。また東京へ行つて來ますと答へると、へえと言ひながら懐中へ兩手を入れてやがて紙にひねつて、ほんの草鞋錢だが持つて行つて呉れとさし出した。自分はうれしく頂いて袂に入れて、何かまだ話し出さうとすると、彼はすぐ一人でお辭儀をしてとぼ〳〵と坂下の方に降りて行つた。

自分はその次の驛から馬車に乘つた。思ひ出して袂から先刻のひねりを取出して見ると、五十錢銀貨が三枚包んであつた。

青空文庫情報

底本：「若山牧水全集　第九巻」雄鶏社
　　1958（昭和33）年12月30日発行
初出：「新潮」
　　1909（明治42）年6月号
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
入力：林　幸雄
校正：今井忠夫
2004年1月20日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

古い村

若山牧水

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/